

「少年の心」から「大人の心」へ

——『西に流れる川』の世界（その5）——

藤 本 雅 樹

From “A Boy’s Will” to “A Man’s Will”

—— An Interpretative Approach to *West-Running Brook* (No. 5) ——

Masaki FUJIMOTO

今回は前回紙面の都合で扱えなかった第5詩集『西に流れる川』（*West-Running Brook*, 1928）第4部〈Sand Dunes〉の中の残りの4篇，“A Soldier”，“Immigrants”，“Hannibal”，“The Flower Boat”の作品を中心に読み進んでいくことにする。

3. A SOLDIER

He is that fallen lance that lies as hurled,
That lies unlifted now, come dew, come rust,
But still lies pointed as it plowed the dust.
If we who sight along it round the world,
See nothing worthy to have been its mark,
It is because like men we look too near,
Forgetting that as fitted to the sphere,
Our missiles always make too short an arc.
They fall, they rip the grass, they intersect
The curve of earth, and striking, break their own;
They make us cringe for metal-point on stone.
But this we know, the obstacle that checked
And tripped the body, shot the spirit on
Further than target ever showed or shone.

今の彼は 朽ち折れた あの槍の姿そのもの 投げ放たれたままに 身を横たえて
もはや なん人の手に取り上げられることもなく 露に濡れ 錆びついている
それでも 今なお 土を耕すように 弛まず狙いをつけて 静かにその身を横たえている。
そんな槍に目をあてて 世界中に狙いをつける僕たちが
これまで 槍の標的となるにふさわしかったものを もはや見いだすことがないとすれば

「少年の心」から「大人の心」へ

それはひとえに この僕たちが たがいに 近すぎる所にいる人々のように
友軍ミサイルの照準を 天空にあわせていながらも
つねに そのミサイルの描く軌道が短くなりすぎているのを 忘れてしまっているからなのだ。
落下し 草原を引き裂き 曲がりくねった地平線と
交錯し 閃光を放って 炸裂する ミサイル。
そんなミサイルの金属の先端部分を目の前にして 僕たちは墓石の上で 思わずすくんでしまう。
だが僕たちは 知っている その肉体を阻み 躓かせた 障害が
今 これまでいつも はっきりと目に見え 輝いていた どんな標的よりも
さらに 遙か彼方にあるその魂を 射とめたのだということを。

1917年4月9日イースターの月曜日、午前7時36分、フランス戦線アラーの戦いの初日、最前線の展望哨で敵の動静を伺うためにその日の朝の第1回目の監視に立っていたエドワード・トマス（Edward Thomas）の元に砲弾が飛来し、炸裂した。39歳の誕生日を迎えて僅か1月余り、将来を嘱望されていた1人の詩人の凄惨な最期であった。当時フロストはその年の1月からアマースト大学で教鞭をとるようになっていたが、その彼の元に畏友トマスの訃報が届く。そして数週間後の27日に、戦争未亡人となったヘレン（Helen）に宛てて次の様な悔やみの手紙を書き送っている。

People have been praised for self-possession in danger. I have heard Edward doubt if he was as brave as the bravest. But who was ever so completely himself right up to the verge of destruction, so sure of his thought, so sure of his word? He was the bravest and best and dearest man you and I have ever known. ...I have had four wonderful years within him. I know he had done this all for you: he is all yours. But you must let me cry my cry for him as if he were *almost* all mine too.

Of the three ways out of here, by death where there is no choice, by death where there is a noble choice, and by death where there is a choice not so noble, he found the greatest way. There is no regret —— nothing that I will call regret...¹⁾

以下、手紙は亡夫君の御霊の平安を祈りつつ今は亡きこの友人に告げたかった様々な心の裡を語り、彼への永遠なる愛を籠めて結ばれている。彼の死がフロストにとっていかに大きな衝撃であったかが充分伺い知れる。さらに7か月後の11月22日、クロス（Wilbur L. Cross, *Yale Review* 誌の編集者）に宛てた手紙の中でフロストは、友の死に接してこれまで自分が何もしえなかったことへの弁明を行いながら、自己の悲しみの感情に流されることなく、その悲劇を通して文学性の高い作品を創作するつもりでいることを次の様に仄めかしている。

I have wanted to say a word to you to explain my failure to do anything about

Edward Thomas. I find he was too near me. Some time I shall write about him. Perhaps it will come to me to write in verse. As yet I feel too much the loss of the best friend I ever had. And by that I don't mean I am overwhelmed with grief. Something in me refuses to take the risk — angrily refuses to take the risk — of seeming to use grief for literary purposes. When I care less, I can do more.²⁾

個人的感情に左右されない哀悼詩の創作の意識の強さと、彼の死とそこから生じる悲しみを単なる文学的素材としてのみ利用することだけは慎まねばならないのだとするような、何かトマスに対する義務感のようなものが窺い知れる文面である。特にこの辺りの問題を探るためには、この2人の置かれていた当時の状況とその出会いの経緯を簡単に記しておく必要があるだろう。

そもそも2人の出会いは、フロストの英国時代に始まるが、その直接の契機となるのはロンドンのデイヴィッド・ナット社から1914年7月に刊行された第2詩集『ボストンの北』(*North of Boston*) に対して、同年8月『英国書評』(*English Review*) 第18号にトマスが次の様な極めて好意的な書評を書いたことがその発端であった。

... The new volume marks more than the beginning of an experiment like Wordsworth's... Within the space of a hundred lines or so of blank verse it would be hard to compress more rural character and relevant scenery; impossible, perhaps, to do so with less sense of compression and more lightness, unity, and breadth. The language ranges from a never vulgar colloquialism to brief moments of heightened and intense simplicity... Only at the end of the best pieces, such as "The Death of the Hired Man," "Home Burial," "The Black Cottage," and "The Wood Pile," do we realise that they are masterpieces of deep and mysterious tenderness.³⁾

そしてその直後にトマス夫妻はレディントンに住んでいたフロスト一家を訪れ、以後家族ぐるみの付き合いを持つようになる。芸術についての考え方や神経質で繊細なその性格面において、この両者は多くの共通点を有しており、2人は急速に親交を深めていった。1915年2月13日のフロストの帰国によって、何通かの手紙による遣り取りはあったものの両者の交流はやや疎遠になってしまうが、一時はトマスもフロスト一家と一緒に合衆国に渡り、ニューハンプシャー州で晴耕雨読の生活を送るつもりでいたらしい。かなり真剣に計画を立てていたにもかかわらず、結局彼はフロストには同行せず、逆に1915年6月、かねてから迷い続けていた入隊を決意し、世界大戦に参戦することになる。同じ芸術家や詩人仲間が多く参戦し、戦場の露となって果てていく周囲の状況に対して恐らくトマスは詩人である前に一個の人間として戦争忌避者的な良心の呵責の様なものを感じていたのではあるまいか。芸術家として単にペンを

通してだけではなく、この大戦により積極的な何らかの行動を起こすべきではないかという彼の苛立ちは、いわゆる局外者的なフロストの戦争に対する態度と時には相いれない点があったかもしれない。同胞を多く失いつつある戦争という現実を目を閉ざして、気心のしれたこの異国の友人と共に合衆国に渡るなどということは、生来生真面目なトマスという詩人には本質的に許されない逃避行為と映ったようである。この辺りの経緯について『エドワード・トマス全詩集』(*The Complete Poems of Edward Thomas*)を編集したR. G. トマスはその序文の中で次の様に語っている。

In February 1915 Edward was laid up with a damaged ankle but seemed determined to follow Robert Frost to New Hampshire and settle there as a farmer of sorts. His enlisting in July 1915 surprised his friends and family, but I doubt if Frost was correct in his belief that 'the decision he made in going into the army helped him make the other decision to be a poet in form.' The relationship between soldier and poet is typical of one side of Frost's own complex personality, but it is not the whole key to his friend's equally complex nature...⁴⁾

この後、R. G. トマスはエドワードの文筆家としての使命感やその芸術家としての真摯な姿勢について語っているが、それはさておくとして、ここにはフロストとトマスの間にある芸術家としての基本的な姿勢の違いといったものが暗示されていることが分かる。つまり、フロストは兵士になって戦場に赴く勇気も、詩人になる勇気も同質のものであるとして、トマスの行動を説明したことがあったらしく、またトマスを前にしてこれに類した考えを語ったであろうことが充分推測出来るわけだが、トマスにとっては結局そうした態度こそ単なる現実逃避の詭弁でしかないと映ったのかもしれない。その後のトマスのとった参戦行動は、恐らくフロストにとっては意外というよりは、むしろフロスト自身の中にある現実認識の脆弱さに痛烈な打撃を与えるものであったのではあるまいか。今トマスの死を前にして、フロストの心は二重の苦しみを背負わされたと言ってもよいだろう。単に、親友を失ったという悲しみだけではあるまい。改めて思い知らされたこの偉大な友に再度自己の本心を語る機会を永遠に失ってしまったのだという現実に対する深い自責と後悔の念が、フロストにとって最も大きな衝撃であったような気がしてならない。今の彼に出来ることは、先のクロス宛の手紙にも仄めかされている通り、トマスの御霊に捧げうるような作品の創作しか残されていなかったといっても過言ではあるまい。しかし、その願いとは裏腹に創作は遅々として進まず、しかも個人的感情を超越したより芸術性の高い作品を目指す意識が強くなるほどに、自己の思いとはそぐわない方向へと流されていく、正に苦しい道程であったようだ。そして難産の末に最初のトマスを悼む「E. T. に捧ぐ」("To E. T. ")という作品が発表されるが、それは、彼の死から3年後の1920年の

藤 本 雅 樹

Yale Review 4 月号誌上においてのことであった（第4詩集『ニュー・ハンプシャー』所収）。

TO E. T.

I slumbered with your poems on my breast,
Spread open as I dropped them half-read through
Like dove wings on a figure on a tomb,
To see if in a dream they brought of you

I might not have the chance I missed in life
Through some delay, and call you to your face
First soldier, and then poet, and then both,
Who died a soldier-poet of your race.

I meant, you meant, that nothing should remain
Unsaid between us, brother, and this remained —
And one thing more that was not then to say:
The Victory for what it lost and gained.

You went to meet the shell's embrace of fire
On Vimy Ridge; and when you fell that day
The war seemed over more for you than me,
But now for me than you — the other way.

How over, though, for even me who knew
The foe thrust back unsafe beyond the Rhine,
If it was not to speak of it to you
And see you pleased once more with words of mine?

「詩人兵士」（“a soldier-poet”）として散っていった最良の友の死を無駄にしないためにも、何かを語らねばならないというフロストの切迫した義務感のようなものが伝わってくる作品である。特に、第4連の「あの日君が倒れた時/戦争は僕のためよりもむしろ君のために終わったように思えたが/しかし今は君のためよりもむしろ僕のためであるように思えるのだ—また別の意味で」（“when you fell that day / The war seemed over more for you than me, / But now for me than you — the other way”）という一節からは、この空白の3年間におけるフロストの精神的苦しみのあり様が充分推察できると同時に、自己内部でまだ消化しきれていない感情の澱のようなものが漂っているようにも思える。また、第3連における、「あの当時は禁句であったもう1つのことが語られぬままになってしまったのだ/すなわち、

勝利とは、失くして手に入るものなのだ」(“one thing more that was not then to say: / The Victory for what it lost and gained.”)という詩人の語りには、参戦につきまとうトマスの死の予感を振り払おうとしていた当時のフロストの不安がにじみでている。互いに想いの丈を総て語り合いながらも、フロストは意識的に死を連想させるような言葉だけは口にしなかったであろう。そして予感が現実のものとなった今、彼は自己に残された課題を懸命に模索しながら、最後に今自分に課せられた語部的役割に対する了解をトマスの霊に求めているわけである。このように、この作品は極めて個人的な感情に支配された部分を多く包含したものとなっていることが分かる。その結果、作品の発表にあたってフロストはこの詩がトマスの死を余りにも個人的な感情のレベルでしか扱いきれておらず、しかも芸術作品としての普遍性に乏しい出来映えだと判断し、さらには *Yale Review* 誌の学術的な誌風にそぐわないのではないかと考えたらしく、これを活字にすることを最後まで躊躇していたようだとされている。⁵⁾その後この友人の死について、フロストは密かに思いを巡らし、やがてここで扱う「兵士」という作品を書き上げ発表することになる。1927年の *McCall's Magazine* 5月号誌上においてである。トマスの死から数えて実に10年後のことである。当初は“The Soldier”となっていたが、翌28年の『西に流れる川』所収にあたって限定的な定冠詞‘The’を改め、そこに含まれる個人的感情を抑えるためか、それを‘A’に変更している。最後まで畏友トマスの存在を意識しての極めて繊細な詩人のこだわりが感じられるところである。しかし、前作「E. T. に捧ぐ」では十分に昇華させることが出来なかったこの個人的感情の汚濁に塗れた詩的ヴィジョンも、この「兵士」において10年の歳月という長い熟成期間の助けを得、様々な紆余曲折を経て、より客観性を帯びたものへと発展していくことになる。積年の思いがここにきてようやく1つの達成を見ることになったわけで、フロストの残した幾篇かの戦争を題材にした詩の中でも最も完成度の高い、メタフィジカルな内容を持つ作品として評価されている——サージャント女史等は技巧面においてもフロスト詩中最高の傑作の一つに数えていが⁶⁾、その理由付けは行っていない。尚、1917年の *Yale Review* 誌1月号には、戦場に赴く覚悟(入隊を決意したのは1915年)を固めたトマスからの手紙に啓発されて書き上げた“Not to Keep”と題する作品が掲載されているが、これが実質上フロストの戦争に関する最初の作品である。しかも、「E. T. に捧ぐ」と共に『ニュー・ハンプシャー』に収められている。この作品は、戦地で夫の死の知らせを妻が受け取るという状況を歌ったもので、次の様に奇しくも後のトマス夫妻を襲う悲劇を予知しているかのような内容となっている。

They sent him back to her. The letter came
Saying.... And she could have him. And before
She could be sure there was no hidden ill
Under the formal writing, he was there,

藤 本 雅 樹

Living. They gave him back to her alive —
How else? They are not know to send the dead. —
And not disfigured visibly. His face?
His hands? She had to look, to look and ask,
“What is it, dear?” And she had given all
And still she had all — they had — they the lucky!
Wasn't she glad now? Everything seemed won,
And all the rest for them permissible ease.
She had to ask, “What was it, dear?”
“Enough,
Yet not enough. A bullet through and through,
High in the breast. Nothing but what good care
And medicine and rest, and you a week,
Can cure me of to go again.” The same
Grim giving to do over for them both.
She dared no more than ask him with her eyes
How was it with him for a second trial.
And with his eyes he asked her not to ask.
They had given him back to her, but not to keep.

この作品の創作経緯について、トンプソンはその伝記の中で、‘He [Thomas] was at home with his wife and children, on leave, for Christmas of 1916, just prior to his departure for France, and his letters were in part the inspiration for Frost’s imaginative war poem entitled “Not to Keep”’ と説明しているが、⁷⁾ 当時トマスはクリスマス前後に友人のエレノア (Eleanor Farjeon) に宛た幾つかの手紙の中で、所属する軍隊のことや、クリスマス休暇 (軍隊の規律で非常に枠が狭かった: 15, 6 人) に家族団らんの一時を持ちたい気持ちや、エレノアから送り届けられたプレゼントやケーキに対する謝礼の言葉等を細々と記している。トンプソンの指摘しているように、恐らくフロストは訓練を終え、いよいよ戦地に赴くことになったトマスとその家族の姿を念頭に置きながら、この作品を書いたのであろう。ただ、上でトンプソンが述べているトマスの手紙がどれを指すのかははっきりとはしないが、1916 年 12 月 31 日付けのフロスト宛の次の手紙などはその内の 1 つと見てよいだろう (当時フロストはアメリカにあって、トマスの作品を出版するのに尽力していた。割注にある EE はトマスのペンネーム、Edward Eastaway の頭文字を指す)。

I was home for Christmas by an unexpected piece of luck. We were very happy with housework and wood gathering in the forest and a few walks. We had some snow and sunshine on Christmas day. Mervyn’s holiday coincided with mine. Some of the time I

「少年の心」から「大人の心」へ

spent at my Mother's house and in London buying the remainder of my things for the front... I wonder have you had your duplicate of the Ms. which I sent over a month ago? It looks now as if I should not see the proofs [of *EE*]. Bottomley of John Freeman will do it for me... When I am alone —— as I am during the evening just now because the officer who shares my room is away —— I hardly know what to do. I can't write now and still less can I read. I have rhymed but I have burnt my rhymes and feel of it.⁸⁾

運良くクリスマス休暇が許されて家族と束の間の一時を楽しんだことの記述から始まり、1か月前に送った原稿の件やその校正刷りに目を通す気になれないので友達にそれを託そうと思っていること、さらに軍隊に戻ってからは、創作や読書に寂しさを紛らそうとするが、うまくいかないこと等、ここには当時のトマスの孤独な心情が切々と語られている。このように、厳しい軍隊の規律の中で、家族の元を離れて日々軍事訓練に明け暮れていたトマスにとって、生きて帰れる保証のない前線出陣（翌年の1月から2月にかけて）を間近に控えたこの年のクリスマス休暇がいかに意味深いものであったかが窺い知れる。さらにエレノア宛の次の手紙には、出陣が間近であることを仄めかす内容と、家族を思う直向きなトマスの気持ちがにじみ出ている。

My dear Eleanor, This address [244 th Siege Battery R. A. Mess, Tintown, Lydd] tells something. We hung about all this morning waitig for our fates... Under the new rule only 15 or 16 can be away at Xmas, and it can hardly include me. But I should have 6 days leave before going over. I did wish to be home —— when I was certain to be in England —— for Christmas.⁹⁾

以上、やや前置きが長くなったが、ソネット「兵士」創作に到るまでのフロスト内部の問題について素描してみたわけだが、次にいよいよこの作品の内容を具体的に検討していくことにする。

この作品の脚韻は、abba/cddc/effe/gg というパターンになっており、メレディスが *Modern Love* で駆使したそれに近い構成であることが分かる。そして韻律は、多少の変化はあるものの、全体としては弱強5歩格が主調となり、哀悼詩の荘重な雰囲気をよく伝えている。まず最初の3行で詩人は、戦火に倒れた1人の兵士の遺体を折れた1本の槍になぞらえているわけだが、ここに見られる折れ錆び付いた槍のイメージには、いわゆる「強者どもが夢の跡」等といった感慨とは本質的に異なる詩人のハードボイルドな感情が潜んでおり、その鋭角的な観察眼を通じて、人間の死の厳肅性がしっかりと捉えられていることが分かるだろう。感傷を越えた詩人の目の確かさと言ってもよい。しかも、死んだ兵士を槍に喩える比喩は、人間の過去の戦いの歴史を意識した詩人のアナロジーとなっていることが分かる。武人の個性的武勇を

象徴する過去の武器と、集团的、非個性的戦闘を繰り広げる近代戦争の一歯車としての武器である兵卒の姿を結び付けようとする詩人の狙いは、死してなお祖国や自由を守るためにその亡骸を不発弾の様に戦場に晒しながら、敢えて「弛まず土を耕すように」(“as it plowed the dust”: ここには ‘plow the sand’ をもじった意味合いの他、武器や農耕具を手にした英国軍と戦った独立戦争時の勇敢な農民兵、特に G. Monteiro が指摘している様に¹⁰⁾、特にエマスの有名な “Concord Hymn” 中の勇敢に死んでいった英雄達の姿、さらには彼の “The Divinity School Address” 中の一節 “And the unique impression of Jesus upon mankind, whose name is not so much written as ploughed into the history of this world, is proof of the subtle virtue of this infusion.” を連想させるようなイメージの重層性が潜んでいる) 抵抗を示すトマスという一個人の存在とその死に含まれる人間の勇気の問題に、エマスが “Concord Hymn” の最終連で “Spirit, that made those heroes dare/ To die, and leave their children free,/ Bid Time and Nature gently spare/ The shaft we raise to them and thee” と歌っているような形で、単に歴史的な意味合いを付加する点にあるばかりではない。むしろ人間の歴史を意識しながら、戦争とは一体何であるのかという素朴な疑問から出発して、最終的には人間社会に内在する精神の危機的状況の本質面を浮き彫りにし、それに警鐘を打ち鳴らすという点にあると考えてよいのではないだろうか。特にこの詩に託した詩人の狙いの中心点は、4行目から8行目にかけてのミサイルの比喩の条りと、後半最後の12行目から14行目の標的となって打ち倒された人間の魂 (“the spirit” —— 勿論この言葉にも、トマスの存在が意識されている) に関する条りの部分であろう。まず最初の部分で、詩人は追悼とか反戦とかいった内容に含まれがちな個人的感情を乗り越え、さらに高次のレベルでの人間社会の在り方の問題に迫ろうとしていることが読み取れる。人間の争の原因はそもそも人間同士が互いに近い位置にあり過ぎるからだと言った詩人はユニークな個人主義的視点を打ち出す。ここに見られる、味方のミサイルが本来なら敵に向けられたはずなのに、その軌道設定が余りにも近い所に置かれているために、結局味方をも巻き込んでしまうことになるというロジックは、やや荒らっぽい言い方をすれば、人間社会とは、本来社会的生活を営む独立した個人の集団であるとする前提を終生崩すことのなかったフロストの基本的な個人主義的姿勢にうまく合致していると言ってよい。人間社会に横たわる様々な利害を巡る確執の最大規模の生存競争が戦争ということになるのだろうが、ここにはそうした人間相互の確執を産み出す原因が、実は我々が無意識の内に個人の領域を侵害し合っている点にあるのだという問題提起が為されているのである。そして最終部分において詩人は、ミサイルという人間内部にある破壊的、侵略的欲求が射止めるのは、単なる敵という標的、即ち我々の外に在る物質的、肉体的標的ではなく、他ならぬ我々自身の内部にある良心や愛といった精神的生命中枢なのであると警鐘を打ち鳴らしているのだ。しかも人間自身が、そうした自己の無意味な行動に

気が付きながらも、現代に到るまで連綿とその愚を繰り返してきた点にこそ悲劇があるのだとすれば、この作品に見られる詩人の視点には現代人の精神的荒廃の危機に対する鋭いアイロニーが潜んでいると言わねばなるまい。そしてそうした問題を最も典型的に提示してくれるのが戦争という極限状況なのであろう。

トマスとの親交の中で、恐らくフロストは戦争と芸術、詩人と兵士等の問題についても随分論議を重ねたことがあったであろう。しかし、この友の迷いや悩みに果たしてどれだけ充分納得のいく返答をなし得たであろうか。トマスの死後10年もの歳月をかけた末に、今ようやく日の目を見ることになったこの作品には、果たし得なかった友の疑問への追悼を籠めた回答が隠されているように思えてならないのである。初めに、筆者がこれを単なる友の死に対する追悼詩ではないと断っておいたのも、実はこうしたフロスト内部の意識の問題が念頭にあったからである。また反戦詩云々に関して言えば、この作品はその根底にある人間社会の歴史性に対するフロストの認識をこそ前提にすべきであり、もし世界大戦の状況やその悲惨さに焦点を絞ってフロストが単に戦争反対論や平和論を展開しているのだと見る考え方があるとするれば、それは一義的に過ぎると言っても過言ではないだろう。要するに、尊い人命を犠牲にする戦争の無意味さを説くところに主眼をおいた反戦詩というのではなく、広く我々人間社会にはびこる暴力の象徴としての戦争イメージを通して、その暴力性が、我々自身の内部にある精神の荒廃という「障害」(‘obstacle’) = 危機的状況の中から生じてくるのだという点を暗示するところに詩人の狙いがあると見てよいのではないだろうか。ただ、この作品は単にこうした危機的状況に対する詩人の警告と詠嘆を歌ったものではない。最終部において、“But this we know” と告げることによって、詩人は最後に人間の持つ英知に一縷の望みを寄せていることが窺い知れる。愚を繰り返しながらも、なおも営々と生き続けてきた人類の歴史に対する深い理解がそれを可能にしているからであろう。こうして「兵士になる勇気も、詩人になる勇気も同じ」という詭弁など通用しないトマスに対して、今ようやくフロストはこの作品を書き上げることによって、彼なりの1つの回答を出し得たのではあるまいか。

この様に、「兵士」という作品には、長年背負ってきた友への贖罪を果たすべき思いに取り憑かれていた詩人フロストの静かなる気概のようなものが満ち溢れている。この作品を発表した翌1928年、夏休みを利用してフロストは妻エリノアや娘マージョリーを連れて、約16年ぶりに英国に渡り、未亡人ヘレンの元を訪ね、さらにはトマスが戦死した土地(Vimy)にまで足を運んでいる。この時フロストの胸にはどのような思いが去来していたのだろうか。数か月の旅行の後、同年秋にこの作品を収めた『西に流れる川』が出版されることになるが、出版が秋になったのは、決して偶然のことではない。出版前に是非思い出の多い英国を訪れ、新しい詩集の話を一言ヘレン夫人に伝えたかったためだとも言われている。¹¹⁾

4. IMMIGRANTS

No ship of all that under sail or steam
Have gathered people to us more and more
But, Pilgrim-manned, the Mayflower in a dream
Has been her anxious convoy in to shore.

帆を張り 蒸気を上げて 航行しながら 次々に
我々のもとに 人々を集めてきた 船は もういない
だが 巡礼者を乗せた あのメイフラワー号は 今でも
夢の中で この国の海岸に 不安な護送を 続けている。

これは、元々プリマス・フェスティヴァルのためにジョージ・ベイカー（George P. Baker：ハーバード大学やイエール大学で作劇法や演劇史を教え、後に全米演劇協会の初代会長を勤めた人物。その教え子にはユージン・オニールやトマス・ウルフがいた）編『ピルグリム・スピリット』（*The Pilgrim Spirit*, 1921）に寄稿した「巡礼者たちの帰還」（“The Return of the Pilgrims”）がその原形であつたらしいが、その後『西に流れる川』に収録するにあたって、その第4連だけを独立させて、上のような4行詩となったのである。サージャント女史はこの詩を読んだ時、英国を離れ、一路故国に向かうセント・ポール号船上に立つ将来に不安を抱えたフロストの姿を連想しながら、さらにこの作品の下敷きとなるイメージを与えたかもしれないローウェル（James Russell Rowell）の人口に膾炙した『現在の危機』（“The Present Crisis”）¹²⁾から次の一節を紹介している。

New occasions teach new duties, Time makes ancient truth uncouth;
They must upward still; and onward, who would keep abreast of Truth.
Lo, before us gleam her camp fires! We ourselves must Pilgrims be,
Launch our *Mayflower*, and steer boldly through the desperate winter sea,
Nor attempt the Future's portal with the Past's blood-rusted key.

作品創作の経緯については定かではないが、もしフロストが、サージャント女史の想像通りに、この時ローウェルの上の詩の一節を意識し、その教訓的・楽観的内容を皮肉りながら自己の置かれた現在の詩人としての不安定な立場から来る不安を先の4行詩に託したのだとすれば、その出発点には極めて個人的色彩の濃い体験が潜んでいることを認めないわけにはいかない。当初この作品が「巡礼者たちの帰還」のどのような文脈の中に組み込まれていたのかを確かめる術は、残念ながら残されていない。しかし、ここに4行という極めて短い形で残されたこの作品を読む限りにおいても、我々は「夢の中で/今もこの国の海岸に向かって不安な護送を続

「少年の心」から「大人の心」へ

けているメイフラワー号」(“the *Mayflower* in a dream/ Has been her anxious convoy in to shore.”) のイメージに仮託された意味内容に、未知の世界に向かう巡礼者＝詩人の不安な眼差しを読み取ることは十分可能であろうし、さらには故郷の地を後にして一獲千金の夢や自由を求め、あるいは大戦の戦火を逃れて、アメリカに渡り続けていた当時の移民難民の心境をも伝えていると読めなくもないかもしれない。ただそこには、ローウェルが歌いかけているような、「我等のメイフラワー号を進水させよ　そして勇敢に舵をとってあの凄まじい冬の海を越えていくのだ/未来の玄関を血錆びの付いた過去の鍵で開けようとしてはならない」(“Launch our *Mayflower*, and steer boldly through the desperate winter sea,/ Nor attempt the Future's portal with the Past's blood-rusted key.”) といった、将来に対する力強い決意のようなもの——悪く言えば気休めや建前的なものなど——の存在し得ない状況が潜んでいたことだけは確かだろう。いずれにせよ詩人は弱強 5 歩格 (iambic pentameter) の安定した規則的なリズムを通して、静かに波打つ漆黒の大西洋の彼方にやがて訪れ来るかも知れない嵐の前触れ (= 不安) の状況を淡々と描き出そうとしているのである。小品ながらこの作品は自己を含めた人間の歴史を思惟するフロストの詩人としての生き方に深く係わる内的体験をその背後に秘めたものとして、殆ど顧みられることがないものではあるが、極めて意味深い内容を有していると見て差しつかえあるまい。特に、「砂丘」に始まるこの第 4 部の中心的テーマである人間の歴史やその運命に深く想いを寄せる詩人の姿が、先の 3 篇の作品、及び次に扱う「ハンニバル」さらには「花船」においてと同様、この作品にも共通して見られる基本的姿勢になっている点を見逃してはならないだろう。

5. HANNIBAL

Was there ever a cause too lost,
Ever a cause that was lost too long,
Or that showed with the lapse of time too vain
For the generous tears of youth and song?

かつて 徒労に終わった 目的など
いく久しく 無駄に費やされた 目的など あったろうか
あるいは 時のうつろいととも に 青春と 歌の 流す 数多の涙にとって
余りにも空しく見えるような そんな目的など あったろうか。

歴史に対するフロストの興味の糸を辿っていくと、ローレンス高校時代にまで遡ることができる。特に、この時代に彼はローレンス高校の機関誌 (*The Lawrence High School Bulletin*) に、コルテスによるメキシコ征服における最後の記念すべき事件——つまり、ア

ステカ王国の最後の王モンテズマの勝利——を歌い上げた「悲しい夜」(“La Noche Triste”)を始め、歴史的人物を素材に採った数編の初期作品を発表しているが、¹³⁾それらはいずれも過去の歴史の中における人間の勇気や孤独に焦点を当てたものが主流となっている。その後この種のテーマはフロスト詩の中で様々な形をとって変奏されていくことになるが、ここで扱う「ハンニバル」は比較的初期の頃に書かれたものと見られている。¹⁴⁾一方、それとは逆に J. C. ケンプなどは、フロストがその生涯の後半 40 年の間(詩集で言えば、*West-Running Brook*, *A Further Range*, *A Witness Tree*, *Steeple Bush*, *In the Clearing*)専ら教訓的な内容を含む短詩に相当エネルギーを注いでいたことを踏まえて、後期の作だと見ているような節がある(ただし、ケンプはこの作品の創作年代を問題にしているわけではなく、その作品傾向に目を向けてのジャンル分け程度の意図しかないのかもしれないが)。¹⁵⁾

1 行目の弱強 4 歩格(iambic tetrameter)を除いて残り 3 行は弱強脚を主調とする 5 歩格(2 行目は行末に強勢のある休止を置く必要がある)の韻律構成を持つこの「ハンニバル」という作品は、言うまでもなく史上屈指のカルタゴの将軍として知られているハンニバルの英雄的行動を念頭に置きながら、歴史の中に埋もれていく人間存在の本質に焦点を当てたものとなっている。第 1 次ポエニ戦争で祖国イスパニアを破ったローマ帝国への復讐を胸に秘め、遠いアフリカのカルタゴから南フランスを経由してピレネーやアルプスやアペニン等の山脈を越え、ローマ遠征に赴いたハンニバルは、世に言う第 2 次ポエニ戦争において次々にローマ軍を破って多大の功績を修めたが、本国の援助を受けることができず、やがてローマの将軍大スキピオに敗れ、さらには自国内の反対勢力の策謀によってカルタゴを追放された揚げ句、東方諸国での再挙に失敗して自決することになった。正に、自己の念願、即ち故国をローマ帝国の搾取から救うという「目的」(“cause”)を果たし得なかった悲運の名将と言われる所以である。ここでもフロストは、先に見た「兵士」の場合と同様、人間存在の本質というものが、単に目的の実現やその大小の如何にあるのではなく、むしろ目的実現のために苦闘する人間の生の過程そのものにあるのではないかと問題提起しながら、「時間の推移」(“the lapse of Time”), 即ち歴史の巨大な歯車に押し潰されていく自己を含む卑小な人間存在そのものに対する深い憐憫の情を吐露しているのである。特に、「時のうつろいとともな 青春と 歌が流す 数多の 涙にとって/余りにも空しく見えるような そんな目的など 果たしてあったらうか」(“that showed with the lapse of time too vain/ For the generous tears of youth and song?”)と問いかける詩人の心には、人間の希望とそれに付随する苦しみへの深い理解と思惟が潜んでいることが窺い知れる。ハンニバルもトマスも、本懐を遂げることなく、歴史の沈黙の中に自己の夢や希望を埋もれさせていったわけであるが、こうした人間の営みの中にこそ我々は総ての装飾を取り払った命の尊さそのものを見て取ることができるのである。このように、この僅か 4 行という圧縮された詩行の中でフロストは、その雄大な歴史的視点を通し

「少年の心」から「大人の心」へ

て人間の生の本質的意味を我々に提示しようとしていると言ってよいだろう。かつて、ローレンス高校時代に書いた「悲しい夜」において127行をも費やして漠然と歌い上げようとしたテーマが、ここでは僅か4行の内に寡黙でしかも極めて含みの多い内容として凝縮されていることが分かるだろう。

The flame shines brightest e'er goes out,
Thus with the Aztec throne,
On that dark night before the end,
So, o'er the fight it shone.
The Montezumas are no more,
Gone is their regal throne,
And freeman live, and rule, and die,
Where they have ruled alone.

(<The Flight> from "LA NOCHE TRISTE," ll. 93-100)

6. THE FLOWER BOAT

The fisherman's swapping yarn for a yarn
Under the hand of the village barber,
And here in the angle of house and barn
His deep-sea dory has found a harbor.

At anchor she rides the sunny sod,
As full to the gunnel of flowers growing
As ever she turned her home with cod
From Georges Bank when winds were blowing.

And I judge from that Elysian freight
That all they ask is rougher weather,
And dory and master will sail by fate
To seek for the Happy Isles together.

漁師が 村の床屋の手元で
法螺話を 取り交わしている
かたや 家と納屋の間の 隅っこの所では
この漁師の 遠洋漁業船が 港を見つけて休んでいる。

その船は 錨を降ろして 日当りのよい芝地に停泊しているのだ
その船は かつて 風が吹き荒れている時に ジョージズ・バンクから

鰐を積んで 帰路に向かっていた頃と同じように
今は ニシキギンボのような花を 一杯に積んで 膨れ上がっている。

そして 僕は あの極楽浄土への輸送を目にして こう思うのだ
彼等が求めているのは もっと荒々しい天候であり
船や船長というものは 運命に従って ともに「幸福の島々」を探すために
これからも 航海を 続けていくであろうと。

初出は1909年5月20日の『ユースズ・コンパニオン』(*The Youth's Companion*)誌である。創作時期はフロスト自身の証言を信用すれば1904、5年頃となるが、他に1900年から1901年にかけてのデリー農場時代ではないかと推測するむきもある¹⁶⁾。作風は先に見た3篇とは趣が異なり、フロスト本来の regional な要素が顔を覗かせている。第5詩集は内容の普遍性を狙う余り、先行する4つの詩集に見られたこの regional な要素がかなり削ぎ落とされて、ややもすれば抽象的、一般的な論理の構築に傾き過ぎており、その結果フロストの持ち味が欠如していると見られがちなところがあるわけであるが、こうした批判については先回も少し触れておいた通り、以後のフロストの詩人としての基本的態度の変化に深く係わる問題でもあるのでそれを否定的要素として即断することだけは慎まなければならないように思える。これについては、いずれ稿を改めて詳述することとして、ここでは結論を先取りして簡単に記しておくだけに留めたい。つまり特に生涯の後半におけるフロスト詩は、具象から抽象、あるいは regionalなものから universalなものへといったパターン化された図式を示すというより、むしろ事物の本質に直接分け入って具象・抽象の枠組を取り払った意味の磁場の構築に向かう傾向を示しており、作品の出来不出来は別としても、少なくともそれが彼の詩人としての意識の内的深化を物語る姿勢転換の実質部分となっているのではあるまいかというのが筆者の密かな思いである。特に、第5詩集を境に didactic な内容を持った作品が増えてくるのもこうしたフロストの基本姿勢の変化と無縁ではない。

さて、第4部〈砂丘〉の最後に置かれたこの作品は、冒頭の表題詩「砂丘」と同じく舞台を海にとっており、文字通り第4部の締め括りに相応しい情景を写し出している。第1連で、かつては遠洋漁業に乗り出して、数々の海の体験を経てきたであろう老漁師が、もはや海洋に乗り出すこともなく、床屋で昔取った杵柄を開陳して見せている場面や、さらには今はもう使われなくなったその漁師の船が打ち遭られている光景が描かれている。かつては鰐漁で賑わっていたであろうニュー・イングランド大西洋岸のある漁村の鄙びた、あるいはのどかな風景を静かに甦らせている冒頭の件りである。そして次に第2連に移ると詩人の目は専らこの打ち捨てられた船に向けられていく。漁に出ていた頃には、大量の鰐を載せていたこの船も、今では岡の上に横たわったまま魚の代わりにニシキギンボという細長い魚のような形をした花を満載し

「少年の心」から「大人の心」へ

ているという〔8行目のジョージズ・バンクは何処の漁場を指すのか定かではないが、カナダのニュー・ファウンドランド島南東に広がる鱈漁場（The Grand Banks of New Foundland）は世界的に有名である。もしかすると、この詩に登場する漁場もこの海域周辺にある“Bank”の1つなのかもしれない〕。仕事をやり終えてなおかつ、花花に取り囲まれながら更なる船出を夢見ているかのようなこの漁船の姿には、晩年を迎えた人間の直向きさが暗示されていると同時に、自己の歩んできた道程と残された人生に思いを馳せる詩人自身の姿が重なってくる。一方で饒舌に過去の自慢話をする1人の老人と、かたや黙して語らぬ船という今1人の老人の姿は、詩人にとっては単なる客観的な対象物ではない。詩人の混沌とした意識に明確な方向性を与え、生の意味付けを促してくれる詩的媒体であり詩人自身の意識の表象そのものであるのだ。最後の第3連において、詩人は「極楽浄土の世界への輸送」（“that Elysian freight”）を続けているこの花船を見詰めながら、我々も彼等と同じように「幸福の島々」（“the Happy Isles”）に辿り着くためには、運命に従って苦難の海を航行するという試練を敢えて受け入れる必要があるのだと認識しているのかもしれない。2度と海に出ることなどないであろう船と、昔語りにも夢を追う船長たるこの老漁師の姿は、単なる過去の遺物として存在するのではなく、それを見詰める詩人の目に人間の生に対する深い共感と自己の前に不透明に横たわる未来への不安を同時に喚起するものとして映っているであろう。高校卒業後の数年間の不安定な時期、ないしは詩人としての将来を模索していたデリー農場時代辺りに創作されたと考えられているこの作品には、このように歴史的時間の枠を超越した「幸福の島々」への願望とそこに至るまでの苦しい「存在の試練」（trial by existence）に対する不安を胸に秘めていた当時のフロスト自身の心境が色濃く反映しているようにも思えるのである。L. マーチンは、最終行に見られる「幸福の島々」探求の姿勢が、「本領をめざして」（“Into Mine Own” 後に第1詩集に収められる際、“Into My Own”と改題される）のテーマへとつながっていくと指摘しているが、¹⁸⁾ 因みにこの「本領をめざして」は社会を離れて運命の暗い闇に閉ざされた自己の存在の在り方を模索する詩人の決意を表明したもので、その姿勢は「花船」に見られる詩人の静観的態度の延長線上にあるものとして極めて興味深い内容を有していると言わねばなるまい。

One of my wishes is that those dark trees,
So old and firm they scarcely show the breeze,
Were not, as 'twere, the merest mask of gloom,
But stretched away unto the edge of doom.
（“Into My Own,” ll. 1-4）

以上、今回は『西に流れる川』第4部〈砂丘〉の中の後半4篇の作品を扱ったわけであるが

この第4部の中心的テーマは、人間の生の営みを無言のうちに呑み込んでいく歴史（の暴力）と、さらにはその歴史という物理的時間を乗り越えて生きていく人間の希望と不安という問題に集約できるだろう。

（つづく）

NOTES

- 1) Lawrance Thompson(ed.), *Selected Letters of Robert Frost* (N. Y. : Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1964), p. 216.
- 2) *Ibid.*, p. 225.
- 3) Linda W. Wagner (ed.), *Robert Frost : The Critical Reception* (Burt Franklin & Co. Inc., 1977), pp. 14 – 15.
- 4) R. George Thomas (ed.), *The Complete Poems of Edward Thomas* (Oxford : Oxford Univ. Press, 1978), "Introduction," xv.
- 5) Jean Gould, *Robert Frost : The Aim Was Song* (N. Y. : Dodd, Mead & Company, 1964), pp. 196 – 197.
- 6) Elizabeth Shepley Sergeant, *Robert Frost : The Trial by Existence* (N. Y. : Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1960), p. 210.
- 7) Lawrance Thompson, *Robert Frost : The Years of Triumph, 1915–1938* (N. Y. : Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1970), pp. 90 – 91.
- 8) Eleanor Farjeon, *Edward Thomas : The Last Four Years* (Oxford Univ. Press, 1958), pp. 234 – 235.
- 9) R. G. Thomas(ed.), *op. cit.*, "Notes," p. 172.
- 10) George Monteiro, *Robert Frost & the New England Renaissance* (Ky.: The University Press of Kentucky, 1988), pp. 142 – 143.
- 11) Gould, *op. cit.*, p. 257.
- 12) Sergeant, *op. cit.*, pp. 149 – 150.
- 13) フロストの初期習作については、すでに別稿で触れたことがある。Cf. 藤本雅樹『『エーリアル型』から『プロスペロー型』へ——詩人フロストの変遷』（『文学と評論』14号、1980年6月1日）、52 – 59頁。
- 14) Sergeant, *op. cit.*, p. 47.
- 15) John C. Kemp, *Robert Frost and New England : The Poet as Regionalist* (Princeton, N. J. : Princeton Univ. Press, 1979), p. 178.
- 16) Thompson(ed.), *Selected Letters.*, p. 355.
- 17) Richard Poirier, *Robert Frost : The Work of Knowing* (N. Y. : Oxford Univ. Press, 1977), p. 55.
- 18) Louis Mertins, *Robert Frost : Life and Talks–Walking* (Okla. : University of Oklahoma Press, 1965), p. 96.

BIBLIOGRAPHY

[Primary Sources]

- Lathem, Edward Connery(ed.); *The Poetry of Robert Frost*. N. Y.: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1969.
- Lathem, E. C. and Thompson, Lawrance(eds.); *Robert Frost: Poetry and Prose*. N. Y.: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1972.
- Thompson, L.(ed.); *Selected Letters of Robert Frost*. N. Y.: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1964.
- R. George Thomas(ed.); *The Collected Poems of Edward Thomas*. Oxford: Oxford Univ. Press, 1978.
- Atkinson, Brooks(ed.); *The Selected Writings of Ralph Waldo Emerson*. N. Y.: Random House, Inc., 1940.

[Secondary Sources]

- Farjeon, Eleanor; *Edward Thomas: The Last Four Years*. Oxford: Oxford Univ. Press, 1958.
- Gould, Jean; *Robert Frost: The Aim Was Song*. N. Y.: Dodd, Mead & Company, 1964.
- Greiner, Donal J.; *Robert Frost: The Poet and His Critics*. Chicago: American Library Association, 1974.
- Hall, Dorothy Judd; *Robert Frost: Contours of Belief*. OH.: Ohio Univ. Press, 1984.
- Kemp, John C.; *Robert Frost and New England: The Poet as Regionalist*. N. J.: Princeton Univ. Press, 1979.
- Lentricchia, Frank; *Robert Frost: Modern Poetics and Landscape of Self*. N. C.: Duke Univ. Press, 1975.
- Mertins, Louis; *Robert Frost: Life and Talks-Walking*. Okla.: The University of Oklahoma Press, 1965.
- Mertins, Louis and Esther; *The Intervals of Robert Frost*. N. Y.: Russell & Russell, 1947.
- Monteiro, George; *Robert Frost & the New England Renaissance*. Ky.: The University Press of Kentucky, 1988.
- Pritchard, William H.; *Frost: A Literary Life Reconsidered*. N. Y.: Oxford Univ. Press, 1984.
- Sergeant, Elizabeth Shepley; *Robert Frost: The Trial by Existence*. N. Y.: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1960.
- Thompson, Lawrance; *Fire and Ice: The Art and Thought of Robert Frost*. N. Y.: Russell & Russell, 1961.
- ; *Robert Frost: The Early Years, 1874-1915*. N. Y.: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1966.
- ; *Robert Frost: The Years of Triumph, 1915-1938*. N. Y.: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1970.
- Wagner, Linda W.; *Robert Frost: The Critical Reception*. Burt Franklin & Co., Inc., 1977.